

2025年9月28日 礼拝説教要旨
 ヨハネによる福音書講解説教54「主よ、信じます」
 詩編86：12～17、ヨハネ9：35～41

目の見えなかつたこの人は、とうとうイエスさまに向かって「主よ、信じます」と信仰告白をしました（38節）。この「主よ、信じます」という言葉は、当時の教会の洗礼式で受洗者が信仰を言い表すときの言葉だと言われます。加えて、ここには「ひざまずく」という言葉があります（38節）。この言葉（プロスクネオ）も教会の礼拝用語になりました。これは神さまをひれ伏して拝むという意味の言葉です。何も見えなかつたこの人が、イエスさまと出会い、イエスさまを信じる信仰が与えられ、そして神さまを礼拝する新しい生き方へと導かれていきます。この人は生まれつき目が見えませんでした。それは見える可能性が全くなかったということです。父なる神さまがこの天地万物を何もない混沌の状態、無から創造されたように、わたしたちの信仰も神さまが何もないところから起こされます。全ては神さまの側の働き、神さまの御業であることを心に留めましょう。

ルターの改革から約100年後ですが、オランダにおいて一つの論争がありました。改革派の教会では「予定の教理」いわゆる「予定論」があります。それは救いがすべて神さまのご意思、決定であり、一方的な選びであって、そこにわたしたちの側の意思、決定は何一つ参与できないという教えです。それに対してアルミニウスという人が主張したのが、信仰を持つか否か、イエスさまに従うか否かは人間の自由な主体的な意思決定に委ねられているとするものです。救いの根拠を人間の中に見出そうとするのです。これは当時教会の中で大論争になりました、これに決着をつけるためにオランダのドルトレヒトで会議が行われました。そこで結果としてこのアルミニウス主義の考えは退けられることになります。この会議で「ドルト信仰基準」が採択されますが、そこには五つの条項があり、その筆頭に「人間の全的墮落」という項目があります。それは神さまの御前に人間は完全に墮落してしまって、人間の中には救われる根拠、可能性はひとつかけらもないということが明らかにされました。残念に思うかもしれません、でもそこに立たなければ、神さまの救いが恵みであることがわからなくなります。

35節に「彼に出会う」とあります。「出会う」と訳された言葉は「見出す」という意味の言葉です。イエスさまはこの人が会堂から追い出されたことを聞いて、彼を探していたのかもしれません。そしてイエスさまの方から彼を捜して見つけ出した。イエスさまはいつもそうです。イエスさまの方から近づいて働きかけられます。漁をしていた弟子たちに「わたしに従いなさい」と声をかけられます。ザアカイの話でも、イエスさまの方から名前を呼び、声をかけられます。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日はあなたの家に泊まりたい」（ルカ19：5）そして「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」とおっしゃいました。

イエスさまの方から捜し出してくださる。この目の見えなかつた人も、最初イエスさまが道端で物乞いをしている彼を見かけられて、関わりをはじめてくださいました。目に泥を塗って目を開いてくださった。そして会堂から追い出されても、両親から見捨てられても、イエスさまだけが彼に心をかけていてくださった。そして彼を見つけて「あなたは人の子を信じるか」と声をおかけになられます。彼はすべてを失っていました。そのところで彼はようやくイエスさまの声を聞き、イエスさまと出会うことができました。でも、この人はまだ自分の見ているその人が誰なのか気づいていない。イエスさまに向かって「主よ、その方はどんな人ですか」と

尋ねています（36節）。けれども「もうあなたはその人を見ている」とイエスさまは言われた時に、彼は自分の目の前にいるイエスさまに気づいて「主よ、信じます」と言いました。この時に彼は心の目が開かれたのです。そして本当に自分の目を開いてくださったお方、暗闇の中から光の中へ導いてくださったお方と真実に出会うことができました。

何もかも失った時に、見えてくる。よく言われることですが、健康な時は健康の大切がわからない。でも病気になった時に気づく。失って気づくのです。わたしたちが救いに導かれる時もそうではないでしょうか。目の前にあるのに気づかない。教会もある。聖書もいつでも読める。でも何かで満たされている時はわからない。失った時に、完全に行き詰った時にわかる、見えてくる。その時にイエスさまが目の前におられたことに気づく。それが今日のところでイエスさまが言われる「見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」（39節）ということではないでしょうか。失ってこそ、見える世界があるのです。

けれども、わたしたちはなかなかそのように「見えない」と言えない、認めないとろがあります。口語訳聖書では最後の41節は「しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところにあなたがたの罪がある」と訳します。見えていないのに見えると言い張る。問題があるのに問題ありませんと言い張る。そういう自分の中の罪が打ち砕かなければならない。そうでなければ信仰は始まりません。この目の見えなかった人もずっと試練を通して来ました。ユダヤ人から責められ、両親から見捨てられ、挙句の果てに会堂から追放される。そうやって打ち砕かれて来た。そこでこそ見える世界、それが信仰なのです。

今日のところで引っかかっていたことがあります。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである」（39節）とイエスさまはおっしゃいました。同じヨハネ福音書に「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」（3：17）とありました。それなのに「わたしがこの世に来たのは、裁くため」とはどういうことなのでしょう。この「裁く」と訳された言葉は「分ける」という意味があります。確かに善悪を明確に分ける。白黒つける。それが裁くということです。でも「分ける」というのはただ白黒つけるだけではありません。選別、必要なものを選り分けて残すことでもあります。

イエスさまがわたしたちを選り分けてくださる。「わたしがこの世に来たのは裁くためである」という言葉の背後には、そういうわたしたちの見栄、強がりをご自身がより分け、そして全部を削ぎ落としてありのままの、見えないままのわたしを御前に立たせてくださるということではないでしょうか。そのためにイエスさまは、「見える」と言い張るわたしたちの罪をすべて負われ、十字架で死んでくださったのです。だからもう見栄を張らなくてもいい。強がる必要はありません。イエスさまが全てを選び分け、ありのままのわたしを御前に立たせてくださいます。

天の父よ。見えないのに見えると言い張る強情なところがあります。自分の弱さを、間違いを認められない弱さがあります。でもそのようなわたしたちの弱さをイエスさまは担い十字架で死んでくださいました。すべてを赦されて御前に立つものとしてくださいました。その恵みに感謝してこの週も歩むことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。